

醫學士賀古鶴所君ハ元ト本縣ノ人ニシテ嘗テ歐洲ニ遊  
ヒテ耳疾ヲ癒ヤスニ妙ヲ得又々啞生ノ耳ト題シタル文  
ヲ公ニセシ事アリシガ現今盲啞學校ノ啞生中單語ヲナ  
シ得ルニ至レルモノアリト云フ近比又々吃ノ匡正法ヲ  
公ニセラレ其原稿ヲ本會ニ惠贈セラレシヲ以テ之ヲ左  
ニ登載セリ君ハ目下東京神田區裏猿樂町ノ耳科院ニア  
リテ專ラ本病患者ヲ治療セラルト云フ

編 者 識

◎吃の匡正法

醫學士 賀 古 鶴 所

吃を患ふるものは善くものいふと能はずして大に酬答の  
便と喪ひ甚だ快からず且つ意の如く談じ得ざるが爲に焦  
燥の念漸く長トて性質寛なる人の騒しくなるあり吃る毎  
に發する下腹部の變痛は呼吸を妨げて心腦に病を醸すこ  
とあり其吃るや語をいひ出でんとして甚だ努むと雖も氣  
息いですす恰も空氣なくしてものいはんとするが如き感あ

り舌ハ釘と以て口蓋ヲ打ちつけられざるが如くなりて少  
しも動かず唇は自ら閉ぢて一語を發すると能はず遂に煩  
悶に堪へずしてわれ知らず手ヲ振り脚を踏ミ目を張り眉  
をひそめ口ヲ尖らせ唾を飛すお至る其様大に美ならず  
吃を患ふるも此を祝るに身漸く長じて語を習ひ初むるに  
つれてまれば發するあり全身の發育善からずして五六歲  
に至りて始めてものいひ出で、吃るあり能辯なる牧師判  
事等の中年に至りて偶然吃を發するあり物に驚き或は怖  
れてこれを發するあり精神を過勞して發するあり熱病や  
煩ひたる後ち衰弱の餘に發するあり正當ならざる生殖機  
關の受用じゆよう若くは故なくして自ら洩すまどのために身心衰  
へて發するあり遺傳の退ふへきあり要するに吃ハ男女の  
性身軀の強弱賢愚によらずと雖も概ね腺病質のものに多  
しとす鼻咽氣管枝等と病めを吃加はり春は吃加へるを  
常とす  
吃の様を見るに教師牧師の講説、學生の書を讀み俳優の  
まうせきを演べ演藝家の歌うさひ物語するにハさし問へ

ざるよ常の談よハ吃るあり常の談にハさし聞へざるに意  
を構へて話さんと云又ハ長者貴人婦人よものいんとす  
れハ吃るあり意我に在らざる時ハ辯舌爽なれども意我よ  
在る時ハ吃るあり語によりて吃るあり呼吸器に病ある時  
よのみ吃るあり又常に吃る者にして酒後の談話流暢なる  
ありこれを酒吃といふ

吃は治すべからずやといふに然らずこれに教ふるよ法を  
以てすれば癒ゆべき病よりされども偏に藥石の力を藉り  
ていやすべきにあらざ蓋し吃の病根は呼吸の正しからざ  
るに在るを以て吃を癒さんとせば先づ呼吸を正さる可  
らずこれを正すを一、呼吸の操鍊といふ又字音を明にい  
ひ出で語を明朗に發せんことを教へざるべからずこれを  
二、發聲の操鍊といふ此の二法を以て吃よ教ふる正科と  
すこれに副ふるに次の法を以て三、朗讀法、韻文散文  
等を緩に聲高に讀上げて聲音の抑揚を正うし訛をさけ假  
にも自然ならぬ音調を生せざる様おなすべし四、諺草、  
逸事、短き物語等の中曾て誦せしよとある文或ハ諳記せ

しことある文を撰びて緩に聲高に演べしめ而して自然な  
らぬ演べ方に陥らぬ様に注意すべし五、戯曲又は謠曲の  
一役よならせ對手を作りて其役の言葉を演べしむべし且  
つ此習の傍ら柔軟筋操を行ひて全身の營養を盛ならしめ  
胸廓腹壁の伸縮を營むべき筋肉の作用を以て壯ならしむ  
べし身心に害ある事ハ勉めてこれをさけしを呼吸器に病  
あるはこれを療し腺病質なるよと強壯劑と與へ人により  
ては山海に遊ばしめ或ハ毎朝攝氏の二十度乃至十四度な  
る冷水浴を取らしめ或ハ按摩法を施し或ハ電氣を用ひ或  
は肉食を勸め或ハ素食を勸免などす

吃を治する法の概ね此の如しと雖も醫ハ通常専ら此に當  
るべき時を有せず世に教育を以て自ら任ずる人にして新  
さに此匡正法を擧行すをあとあらんか其世を益するあと  
豈少しとせんや歐洲よ於ては到る處に吃の匡正所ありて  
醫専ら匡正の事を監そ其業頗る盛にして盲啞學校と並び  
立ちたり我邦にハ未だ此の如きものあらす

瓊國井イン府の吃匡正所よてコオン博士が教ふる法の頗

る簡易にして効顯著しきものなり此法によれば日に一時  
間呼吸操鍊と發聲操鍊とを教ふるを以て足れりとす故に  
且らく匡正所を設け難き地方に於ては小學教員諸君にし  
て匡正の勞と取りなべ則ち可もらん父兄に去て日々嚴正  
に子弟を教ふる事を得ば家庭に於てするも可あるべく年  
長けたる者に於ては自ら正すも可ならんコオン博士の正  
科たる吃の匡正法はこれを三に分つ

第一 呼吸の操鍊

第二 發聲の操鍊

第三 發語の操鍊

呼吸の操鍊は十一課あり週を追ひて順次に去れを習ふ  
發聲の操鍊は二課あり發語の操鍊は七課あり終の二  
種の操鍊は呼吸の操鍊の二課と共に日々演習すべし演習  
の時間は休息を加へて日々一時間とす小兒及弱質の人の  
各課の終に復習となさしむべからず演習の間の姿勢を正  
すよと恰も兵士の直立したるが如くならしむべし即ち上  
肢を直に伸ばりて下に垂れ肩を後よそらせ胸を前につき

出し頭を直にす目の物を見ずして地と見るべし發聲發語  
をなすに充分よ口を開きて談話を營むべき機關をして  
正しき運動をなすよとを得せしむべし聲音の叫びて高き  
に失せず復たさこやぎて低きに失せざるべし而して自然  
の聲調と語調とを損せざる様よなすべし演習の時刻は朝  
を善しとす朝食と午餐と此間に於てすべし空腹と満腹な  
る時よは決して習ふべからず心地快からむなりて嘔氣を  
催ふ一頭重眩暈等を起すことあればなり身心を過勞しよ  
る後に於ても亦然りとす

次に掲げたる符號の字ち下り矢は吸氣上り矢は呼氣を示  
す矢のふけ常なるは呼吸のゆるやかなるべきを示す即ち  
適宜に口を開き舌を平に置きて緩小呼吸すべし「も」とい  
ふ雜音と生せん矢のたけ長き呼吸の甚だ緩なるべきを  
示し其短き呼吸の急なるべきを示す呼吸をして急ならしめん  
と欲せば潤く口を開きて、吸ひし氣を一度にとつとはき  
出すべし正しくこれをあし得かを横膈膜に一種の激動を  
感せん矢の數條連りよるの吸氣若くは呼氣をば數度よ分

ちてなすべきとを示す矢の側に記したる數字は吸氣と呼氣との間にしげき氣息を止むべき間あると秒時もて明に示し隔ての線ハ此にて小休をなすべきことを示す

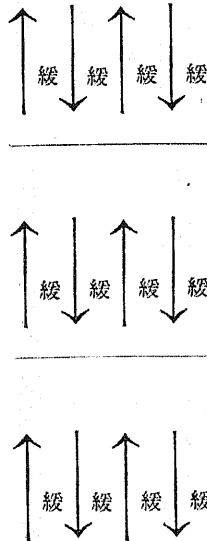
第一 呼吸の操練

呼吸を習ふに宜しく週を追ひ序を正うして進むべし決して當初より各課を通じて習ひ或は彼れ是きと交へて習ふ可らず吃者の呼吸の正しからざるは吸氣にあらずして概ね呼氣にあり常人も平よ吸ひて平よ呼くに吃者は平よ吸へども平にはくこと能はず氣息多しふるひて波状をなし或はきれざれにいづこれよ聲を加へしむれを即ち吃るなり此を以て初の一週間には先づ正しき通常の呼吸を習はしめ次て緩急様々なる呼吸或は吸ひある息をしばらく屏めて後ちは死或は一息に吸ひ又いはくべきを數度に分ちて吸ひ又いはくなどの變調を習はしむ

隔ての線の小休と三四度呼吸を習へる毎に一息二息憩むべきをいふ斯く氣息をやすめずして習はば呼吸漸く亂れて息喘しくなり遂には屏息して頭痛眩暈などを起す事

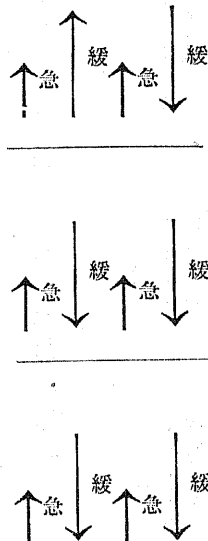
あるべし

第一課 正整なる吸氣及呼氣 第一週お於て日々疲るゝまでこれを習ふべし



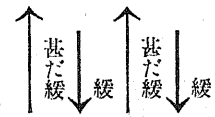
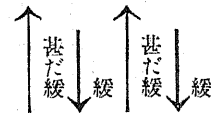
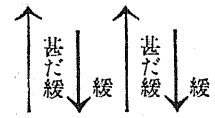
以下倣之

第二課 緩なる吸氣及急なる呼氣 第二週に於て日々氣息の續くまでこれを習ひて第一課を復習すべし



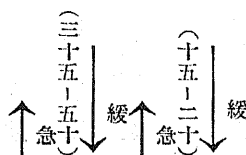
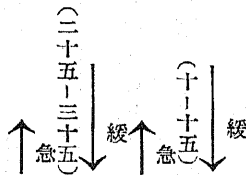
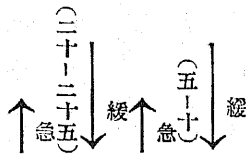
以下倣之

第三課 通常の吸氣及甚だ緩なる呼氣 第三週に於て日々疲るゝまでこれを習ひて第二課を復習すべし

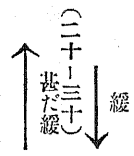
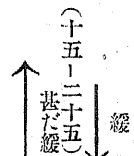
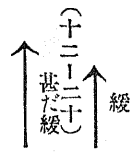
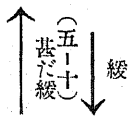


以下倣之

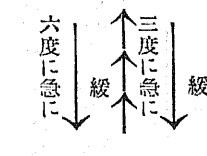
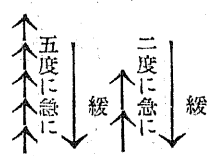
第四課 吸ひたる上の屏息、急なる呼氣 第四週に於て日々これを習ひて第三課を復習すべし 數字は屏息の間の秒時を示す、小兒婦人は上の少き秒數に於てし男子は下の多き秒數に於てす



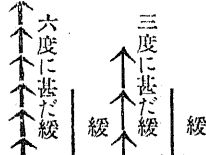
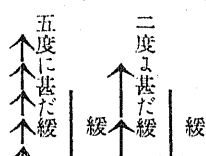
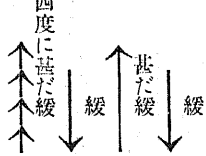
第五課 吸後の屏息、甚だ緩なる呼氣 第五週に於て日々あれを習ふべし數字の解り前課に同じ



第六課 緩なる吸氣、數度に分ちて急なる呼氣 第六週に於て日々これを習ふべし但し適宜の休息をなしてこれを復習すべし

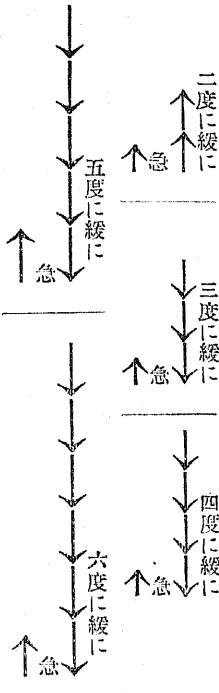


第七課 緩なる吸氣、數度に分ちて甚だ緩なる呼氣 第七週に於て日々これを習ふべし但し適宜の休息をなしてこれを復習すべし

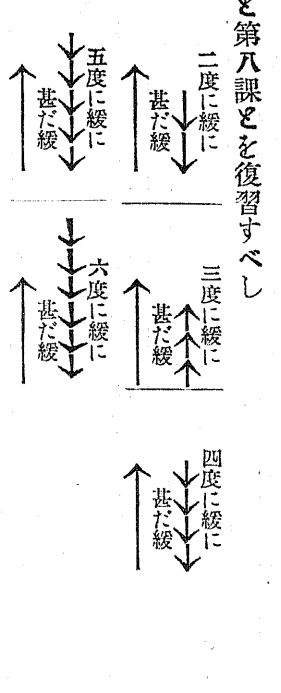


第八課 數度に分ちたる吸氣、急なる呼氣 第八週に於

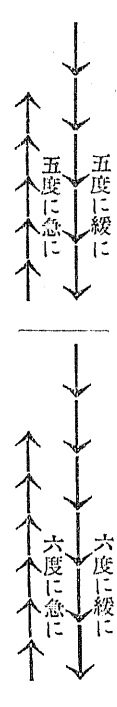
て日々これと習ふべし但し適宜の休息をなして此の課と第七課とを復習すべし



第九課 數度に分ちたる吸氣、甚だ緩なる呼氣 第九週に於て日々これと習ふべし但し適宜の休息をなして此課と第八課とを復習すべし



第十課 數度に分ちたる吸氣、數度に分ちて急なる呼氣 第十週に於て日々これを習ふべし但し適宜の休息をなしてこれを復習すべし



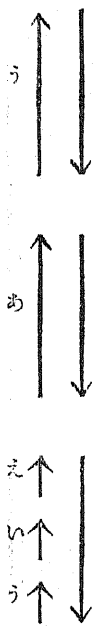
第十一課 數度に分ちたる吸氣、數度に分ちて甚だ緩なる呼氣 第十一週に於て日々これを習ふべし但し適宜の休息をなしてこれを復習すべし



第二 發聲の操練

此操練は匡正中日々行ふべし、これを習ふまは成るべく大き聲にて腹にこたふる様になすべし細き聲はいひ出し易けれども匡正に甲斐なし

第一課 母音



(論 說) 吃の匡正法



第七課 まり(鞠)あり(蟻)ゆめ(夢)うめ(梅)

〔注意〕 發語の採録中よ掲げざる語と撰び代んと欲せば

宜しく左の數條に注意あるべし

- 一、音調の原語に似たるを先にして語意を後にす
- 一、五十連音に基きてか、さ、た、な、は、ま、や、ら、わ、を、お、に、代、へ、又、こ、と、の、ほ、も、よ、ろ、を、を、ね、に、代、へ、な、ど、し、て、猶、能、く、語、を、な、す、も、の
- 一、普く世間よ知れ渡りふる語よして成るべく雅なるもの

一、吃者のいひ難き語よりは寧いひ易きもの

一、唇音、舌音、齒音、口蓋音等に就きて斟酌すべき事  
此匡正法に就きて著者に通信せむとするものと男女、年齢、強弱、吃の原因、吃る模様、兩親兄弟姉妹の健否存没(若し病あり、若くは病没したるは、神經に關する病なりしか、又吃なりしか)を東京神田區裏猿樂町耳科院よ告げ越されたきものなり

◎蛇咬及ヒ昆虫ノ螫傷ニ就テ

醫學士 三輪 徳 寬 述

蛇毒ハ種々ノ蛇類ノ咬傷ニ由テ來ル者ニシテ熱帶地方ニ於テ殊ニ多ク且危險ナルモノナリ而シテ其毒性ハ何種ヲ問ハス皆同一ノモノニシテ其毒量ハ或人ニ由レハ〇、〇三—〇、〇六五乃至〇、三ヲ有セリト云フ又他ノ實驗說ニ由レハ蛇ノ饑渴時ニハ其毒量多シト又平素手慣レタル蛇ハ山間ニ棲息スルモノヨリ其毒少ナシ其性質ハ白黃色ノ流動物ニテ無害ナル「エビテル」ヲ有シ固有ノ微菌ヲ有セズ空氣ニ暴露スルキハ稍粘稠トナリ之ヲ貯蓄シ若クハ乾燥シ或ハ亞爾個係兒虞利斯林等ニ混スルモ其毒性ヲ滅却スルコトナシ動物ノ皮下若クハ靜脈中ニ之ヲ注射スルキハ血尿血唾血便等ヲ發シ遂ニ痙攣ヲ起シ運動麻痺呼吸困難等ヲ以テ死ス亦或人ハ此死因ヲ呼吸中樞ノ麻痺心臟麻痺脊髓出血赤血球變化等ニ歸セリ而シテ其毒ノ本性ハ未タ不明ナル所ノ一種ノ「アルカロイド」ナリ毒ノ所在ハ人体ノ耳下腺ト同一ノ構造ヲ有シ且同一ノ處ニアル毒腺中ニ